

## 民話・伝承一覧

## 山の神とオコゼ

### 尾鷲市

二月七日の朝、村人達が山神社やまのかみじやの前に並び、「ちょっと山の神に、オコゼをお見せ申す」代表がそう言って、上着の下に隠し持ったオコゼをちらっと見せ、すぐにしまい込みます。そのとき、後ろに並んでいた人たちがいっせいに「うわっはっはっは」と大笑いします。

このちょっとユーモラスな儀式は、現在も続いています。それには、こんなお話が伝えられています。

むかし、むかし、まだ神様が人間と同じ姿で、一緒に暮らしていたころのことです。

矢ノ浜村でも、山を守ってもらうため、山の神さまをまつていました。

山の神さまは、たいへん美しい方でしたが、気性が激しく、負けることなど絶対に許さない神さまでもありました。

ですから、山に美しい娘が入ったり、自分以外のものに“美しい”とか“すてき”“立派”などといった言葉をかけるのを少しでも聞きつけると、もう大変なことになりました。

大雨や大風で山は荒れ狂い、しばらくは手のつけようがなく、黙ってじっと静まるのを待つだけでした。

そんなことがたびたび起こるので、村人たちは、「何とかしなければ」と知恵を出しあいました。そして、村人たちが考えついたことは、お祭りの日に社の前に海や山の幸をどっさり並べ、お参りすることでした。

ところが、お祭りの日、ごちそうを並べていると急に雨が降り出し、風が強くなって、山が荒れ始め、そなえたごちそうもどこかに吹き飛ばされてしまいました。

「これは一体どしたんじゃ。せっかくごちそうをいっぱい供えてお参りしようと思とるのに、山の神さまが怒んりよるわい」

村人たちは困ってしまい、すぐに集まってどうしたものかと相談をしました。

「こんな立派なタイや……………」

「こんなに美しい姿のスズキを……………」

口ぐちに話しているのを聞きつけた村の長が、膝をたたいて、

「それやがな。その立派とか美しいというのが悪いんじゃ。山の神さまはそれが気に入らんものやろ」と大声をあげました。

そして村人立ちに指図して、すぐに姿形の醜い魚を供えさせました。

それがオコゼだったので。

村人がオコゼを供えると、今まで降っていた雨や、吹いていた風がぴたりとやみ、山も静まりました。

それからというもの、祭りの日には魚の中でも醜い姿のオコゼを見せ、それを一同の者が笑い飛ばすことで、山の神さまの機嫌を取り結ぶようになったということです。

むかし、むかし、イザナミノミコトが七里御浜しちりみはまの大なぎさに出て、魚つりをされていた。

もう昼近くなったのに、ワカナの子一匹もつれない。「つまらないなあ」と思いながら、じっとつり糸をながめていると、何か青あおとしたものが波にゆられながら流れてきた。

何げなくハネ(竿)の先でひろいあげてみると、それはハマユウの葉でだいじそうにいくえにもていねいに包みこんであった。

「何だろう」

と思ってそれをといてみると、中には黄金色のつぶつぶの実がたくさんついた、見たこともないめずらしい草の穂が入っていた。

「何という草だろう」

パラパラと手のひらにその種を落としてみると、一つぶ一つぶが陽の光にかがやいて、はち切れそうによく実っている。

「これは、きっと食べられるものにちがいない」

ミコトはさっそく三つぶ四つぶ口に入れてかんでみた。

すると、どうだろう。小さいときに八八神に抱かれて飲んだ乳のような甘い味がする。

あまりのおいしさに、また三つぶ四つぶ、また三つぶ四つぶとつまんでいるうちに、いつの間にかおなかがいっぱいになって、急にからだじゅうに元気がみなぎるような気がした。

「これはありがたい。まったくの命の種だ。もし、この種をまいて育ててみたら、みんながどんなにたすかることだろう」

そう思ったミコトは、急いで家に帰った。そしてその種を、有馬の大池ありま おおいけ やまさきぬま(山崎沼)のなぎさつのもり(津ノ森附近)一面にばらまいた。

春がきた。

ある日ふと、大池のなぎさに行ってみると、すがすがしい若緑の、めずらしい草があたり一面にめばえていた。

「おお、そうだ。これはあのときまいた“いのちのたね”の草だ。いねの苗だ」

イザナミノミコトは、ひとりごとをいいながら、はじめて見たあの美しい種の色や、おいしかった乳のような味を思いうかべて、両手でなんどもなんどもいねの苗をなでてみた。

それから、毎日のように水をやったり、じゃまな草を引いたり、悪い虫をとったりして、だいじにだいじに育てた。

有馬の大野おおのに、あちこちにもえたつような穂が出て、花がさいた。

そして、いつの間にか夏も過ぎ、すいすいとトンボが飛びまわる秋になった。大池のなぎさはいねの穂がそよいで、黄金の波がかがやいた。

それからというもの、人々はうえるかつえるの心配もなくなり、毎年、秋には、

花の幡たて、笛に鼓に歌い舞いの大祭りが行われるようになった。

これが有馬の米づくりのはじまりである。米づくりはここから日本国中にひろまると伝えられている。

## とまり 泊の観音さまと鬼退治

### 熊野市

熊野の海岸部から山間部に登っていく坂道の途中に、大泊<sup>おおどまり</sup>というところがある。首を伸ばせば鬼ヶ城<sup>おにがじょう</sup>の東側が山の間に見えそうな、そんな海から山への境の坂道である。

今は国道四十二号線が走るが、その付近に清らかな滝が流れていて、その名も清滝<sup>きよたき</sup>という。雨量の多いときはごうごうと落ちるが、ふだんは静かな水を流し、車で行き交う人の心を慰める。

その清滝の流れてくる源の山深くに、その昔、比音山清水寺<sup>ひおんざんせいすいじ</sup>という観音さまをお祭りする寺が建っていた。そのため、この滝を観音滝ともいう。

滝から二百メートルほどくだったところに、山への登り口がある。国道からほんの少し山側に折れただけで、そこはもう別世界への入り口なのである。杉木立の中に石畳の坂道が続いていて、観音さままで十丁(約1キロメートル)と刻まれた石の道しるべがあり、その横に七体の石の地蔵さまが立っている。ここから、かつての比音寺清水寺まで、西国三十三所の仏が並ぶ巡礼道となっていて、道中あちこちに石の地蔵さまが立っている。

険しい坂道をその石の地蔵さまをたどって登っていくと、やがてさらさらと流れる水の音が聞こえてくる。清滝の源流である。そこからなお山深くまで登りつめると、整然と積まれた石垣が清らかなたたずまいで現れる。泊の観音さま、つまり比音寺清水寺のあとなのである。耳を澄ますと、ここに観音さまをご本尊とするお寺を建立したとい

うあの英雄<sup>さかのうえのたむらまる</sup>、坂上田村麻呂將軍の勇気りんりんたる声が聞こえてくるような気がする。

その昔、平城天皇<sup>へいげい</sup>のころ、諸国に鬼神魔王<sup>きじんまおう</sup>と呼ばれる鬼たちが騒ぎたてて人びとを苦しめていた。ここ熊野で

も、一鬼<sup>いちぎ</sup>(御浜町市木)、二鬼<sup>いちぎ</sup>(熊野市二木島町)、三鬼<sup>にぎ</sup>(尾鷲市三木里町)、八鬼<sup>みき</sup>(尾鷲市八鬼山)九鬼<sup>みきさと</sup>(尾鷲市九鬼町)、そして鬼の本城<sup>やき</sup>、鬼の本<sup>やきやま</sup>(熊野市木本町)などに城を構えていた。

当時、武勇並ぶものがないといわれた大將軍・坂上田村麻呂は鬼退治を命じられ、兵を率いて熊野に赴いた。しかし、鬼たちは深山幽谷に逃げ隠れ、行方知れずになってしまった。そこで、ひとときわ高い山があったので、その山に登って観音さまのお名を一心に唱えて祈っていると、不思議なことにどこからか、烏帽子をかぶった天人が現れた。

「これより東方の海辺に岩屋あり、多蛾丸という悪鬼これに立てこもれり。海を渡り熊野の奥の末までも行きて大悲の弓にて悪鬼を討つべし。我は大馬権現なるぞ」

という、白馬にまたがり西天に飛び去った。烏帽子の天人が飛び去ったところなので、紀宝町にひとときわ高くそびえるこの山のことを、今も烏帽子山と呼ぶ。

このお告げを聞いて勇気が倍加した將軍は、ただちに兵船を海に浮かべ、東に漕ぎだした。しかし、岩屋を望む沖までは来たものの、鬼ヶ城と呼ばれる硬い岩に守られ、岸壁に強い波が打ちつけてとても近寄れない。さすがの將軍も途方に暮れてしまった。

すると、沖の島に一人の童子が現れ、差し招くではないか。兵船をこぎ着けると、童子はおもしろおかしく手足をあげて歌い舞う。つられて兵も一緒に歌い踊りだし、ついに大舞踏会になってしまった。

あまりのにぎやかさに、身の丈七尺(約二メートル)もある鬼ヶ城の大將・多蛾丸もつい気を奪われ、思わず岩屋の戸を開いてしまった。そこを逃さず、田村麻呂將軍の大悲の弓がどっと射ぬいた。

魔王 / 多蛾丸を見た島“魔見ガ島”の童子は、鬼が退治されたのを見届けると、輝かしい白い光を放って、北方の峰のかなたに飛び去っていった。

田村麻呂将軍が、その童子の飛び去った後を追って険しい山の中をたどっていくと、深山の頂上に一丈(約三メートル)四面の洞窟が現れた。紫雲がたなびいていて、えもいわれぬかぐわしい香りが漂ってくる。

将軍は感ずるところがあり、幼少の頃から肌身離さず持っていた一寸八分(約5センチメートル)の千手観音を納めする寺を建立して治国平和の霊場とした。地形が京都音羽山に似ていたので、比音山清水寺と名づけた。

これが泊の観音さまなのである。千手観音は、今は大泊の清泰寺に安置されている。

坂上田村麻呂将軍は、その後も熊野中の鬼を尾呂志の風伝峠まで追いつめ、四匹の鬼を生け捕りにし、都に凱旋した。

今は廃寺となった比音山清水寺のあとには、石の地蔵さまがさやしい表情でいくつも立っていて、さわさわと杉木立をわたっていく風の音のみが静かに聞こえている。

## しゃっぺ滝

### 海山町

むかし、奥熊野に木津という小さな山村があった。そのむらに木こりの名人、しゃっぺさんといわれる人が住んでいた。

木津を流れている大きな川の上流には、木々の生い茂ったどん詰まりに滝があった。しゃっぺさんは、その近くに掘ったて小屋を建てて、泊まり込みで木を切ったり、刻んだりしていた。

しゃっぺさんは、見るからに力持ちという人で、働き者であった。それで木こり仲間から、“腕が立つ、しゃっぺさん”といって慕われていた。

ある日の昼休み。しゃっぺさんがナタを研いでいると、この辺りでは見かけたことのない鬼がやってきて、

「それは、何じゃ。何しとるんじゃ」

と尋ねた。

「これかあ。鬼の首を切ってやっつけるもんじゃ」それを聞いた鬼は、いつの間にか、こっそりといなくなった。しゃっぺさんは、あたりを探してみたが、どこにもいなかった。

それからいく日が過ぎた。しゃっぺさんが同じ場所で働いていると、どこからともなく、またあの鬼があらわれ、

「この前研いだナタと違うが、どうしたんじゃ」

「もう切れんようになったから、捨てたんじゃ」

といったら、鬼は正体をあらわし、しゃっぺさんに襲いかかった。

不意をつかれたしゃっぺさんは、倒れそうになりながらも鬼の首根っこをつかみ、まっ逆さまに滝つぼへ落ちていった。その後、しゃっぺさんの姿を見た人はいなかった。

村人たちは、しゃっぺさんの人柄を思い、だれからともなく掘っ立て小屋があったところの滝を“しゃっぺ滝”と呼ぶようになった。

## 木葉天狗

全域

むかし、むかしのことである。

熊野の赤羽谷という山深い里に、腕のよい木こりが住んでいた。

ある日のこと。いつになく、奥山の大杉谷との境にある千千代ヶ峰まで足を踏み入れ、木を切り出していると、「こらあ。おれさまの山を荒らすのは、だれじゃ」と大声がして、天狗どんが出てきた。

栗のような目、真っ赤な顔。そして三十センチもあるような鼻を突き出した、みるからにおそろしそうな天狗である。

木こりはおどろいたが、なにくわぬ顔で仕事を続けた。

すると、天狗どんはばかにされたと思ったのか、いよいよ顔を真っ赤にして、

「お前はおれの力を知らないな。よし見ている。大きくなって、お前を踏みつぶしてやるからな」そうになると、持っていた大八手の葉を、右から左へバタラバタラとあおぎはじめた。なんと、たちまち十メートルもの背の高さになった。

木こりは、落ち着いたふりをしていった。

「おら、年中、高い大きな山で仕事しとる。高いものや大きなものは、なんもこわくないぞ。おらがこわいのは、小さなものだけだ」

すると、天狗どんは、

「なんだ、そうだったのか。小さくなるぐらいはかんたんだ。どうじゃ、どうじゃ」

今度は、大八手の葉っぱを、左から右へバタラバタラとあおぎだした。見る見るうちに、天狗どんの体は小さくなり、とうとうアリぐらいになってしまった。木こりは、

「ああ、こわい、こわい」

といいながら、その小さくなった天狗どんを、指でつまみあげると、手のひらの上のにせ、大きく息をすいこんで、思いっきり「フッ」と吹いた。

天狗どんは、あっというまに、どこかへふっ飛んでしまったそう。

それからというもの、大杉谷や赤羽谷から天狗どんの姿はまったく見られなくなり、木こりたちも安心して山仕事ができるようになったということじゃ。

## 三次郎ばなし

熊野市

むかし、むかし、飛鳥の佐渡というところに、三次郎という男が、貧しく暮らしていた。  
この三次郎には、いろいろな話が残っている。

### 一、三次郎のふれまい

ある日のこと、三次郎がかまどの火をどんどんたいて、煙をさかんにだしていた。ふだんはあまり煙もたてない三次郎の家から、たくさん煙があがるので、村の人たちは、  
「きょうは三次郎さんとこ、いったい何ごとだろう」  
と不思議がっておった。  
そこへ三次郎がやってきて、  
「ふれまい(人びとにごちそうをすること)だ。ふれまいだ」  
と村中にふれ歩いた。  
それを聞いた村人たちは、せっかくよんでくれたんだから、とたくさん集まってきた。ところが、いつまで待っても、三次郎がごちそうをだしてくれそうにない。集まったひとびとは、  
「三次郎のやつ、ふれまいだとよんでおきながら、何もだそうとしない」  
とだまされたことを知って、おこりだした。  
すると三次郎は、村人に、  
「おまえら、そんなにごちそうをよばれたけりゃ、先におれをよんでおけ」  
といった。これを聞くと、村人だちはぶんぶんおこりながら、家へもどった。  
このことがあってから、先にうまいことをいっておいて、何もしないことを、“三次郎のふれまい”というようになった。

### 二、三七日

ある日、三次郎が家のそばを流れている小川の水をばやーとながめておった。すると、米のとぎ汁らしいものが真っ白に流れてきた。それを見て、三次郎は何か思いついたらしく、家の中へ入っていった。  
それからまもなく、三次郎は村中をまわって、「親のみなぬか(三七日一人が死んでから二十一日たった日のこと)だから、参ってくれ」  
といっぺふれ歩いた。それでお参りに、たくさんの人が集まってきた。  
やがて、お参りの客の前に、ふたつのおわんが並べられた。客がおわんのふたを取ってみると、おわんの中には、料理らしいものは何もなく、ぬかがいっぱい入っていた。  
招待された客は驚いて、  
「三次郎さん、これはいったいどういうことだな」と聞くと、  
「これが、みな、ぬか(三七日)だ」  
という。村人はあきれかえって、家に戻ってしまった。

### 三、印ろうをもらう

熊野では、きざみたばこ(昔の人は、細かく切ったたばこを金属の先につめて吸った)を入れる印ろうのことを、ヤロとよんだ。  
三次郎は、ある人の持っている印ろうを指差して、いかにもめずらしそうに、  
「これは、何じゃのー」

とたずねた。持ち主は、三次郎のやつ、こんなものも知らんのかなと思ひ、なにげなく、

「これか。これ、ヤロじゃないか」

と答えた。すると三次郎は、待ってましたといわんばかりに、

「おおきに、ではもろうとこ」

というさっと持って行ってしもうた。

印ろうを取られた人は、くやしくて、くやしくてしょうがない。そこで、

「よし、いつか、うまく取り返したろう」と思って、よいおりを待っていた。

それからしばらくして、その印ろうを三次郎が持っているところに出くわした。これはいいあんばいと、男は印ろうを指さして、「それは、何じゃ」と問いかけた。

すると、三次郎は、

「ああこれか。これは、フタツ ガツタリ(入れものとフタがぴったりあう)というものじゃ」とすました顔で答えた。ヤロといえどとれるのに、うまくにげられてしもうたと、それきり三次郎から取り返すのは、あきらめてしまった。

## ほら久

紀伊長島町

むかし、むかしのことだ。

長島浦に、ほら久とよばれるほらの名人がいた。

ある人が、

「ゆんべ、どえらっきたい(たいへんおおきい)ネズミをとったで。イタチくらいあった」というと、ほら久、

「なんの、おらとこでつかまえたネズミは犬くらいあったでえ」といいかえず。

「ゆんべ、えらい風やったのう」

とはなしかけると、

「ほんとじゃ。あのまぜ(東南の風)で、大島がだいぶこっちゃんへよってきたのう」とすましている。

ある日のこと、大きなクモの巣を見た人が、「ほら久、八畳敷もあるクモの巣を見たでえ」というと、

「なんのなんの。おらの見たクモの巣は、なんとその巣のはしからはしまで、十八里(約七十キロメートル)もあつたでえ」

と、ほら久がいいだした。

いくら何でも話が大きすぎると、その人、

「おまえ、それはほらにしてもでたらめすぎる。おれをあんまりばかにするない」

と顔色をかえておこりだしたんで、ほら久、あわてていいわけをしたそうな。

「いや、この話だけはほんとのこと。クモの巣がクリの木とクリの木の間にはられとつたんじゃい。クリ(九里)とクリ(九里)をたしてみやんせ、あわせて十八里じゃ」

このほら久が、あるとき、赤羽川の渡しで少しばかり大きなウナギをつりあげた。

さあ、ほらをふくのふかないの。あう人ごとに、こういうたそうな。

「おらがつつたウナギ、頭は牛の頭くらいもあったかなあ。川から引き上げるときは、糸を馬にまきつけて、手つどでもろうた。ようやく引きあげ、半里(約二キロメートル)ほどはなれた二郷の宮さんのスギの木にゆわえつけたんやが、からだの上にとまっとつたカラスが、びっくりしてとびあがりよつた。それでも、尾っぽはまだ川岸の石垣のところにあつたもんなあ」

## 種まき権兵衛

### 海山町

むかし、便ノ山村に上村権兵衛という人が住んでいた。

畑仕事得意でなかった権兵衛さんは、付近の荒地を開墾して種をまくものの、カラスや小鳥に種をついばまれ、人々から笑われた。しかし、なくなった父の望みであった農業を一生懸命頑張っ村一番の農家になった。

また、鉄砲の名手であった権兵衛さんは、田畑を荒らす獣や鳥を撃って村人たちに喜ばれ、近くの村から遠くの村まで、鉄砲の名人として知られていた。

そのころ、馬越峠は、伊勢、那智への旅人や巡礼たちがたくさん行き来していた。

その馬越峠付近の山中に大蛇が住みつき、ときどき現れては人に襲いかかり、村人や旅人たちを困らせていた。

それを聞いた権兵衛さんは、どこで待ち、どんな方法で大蛇を退治するか、いろいろと考えた。なにしろこの大蛇、鹿撃ちによく猟師達の話によると、胴体が苔だらけで岩のようにかたく、とてつもなく大きいという。

権兵衛さんは、大蛇を仕とめるには、いつもよりかたい弾がいますと考え、鉄の棒を溶かして弾をつくった。

次の日、準備を整えた権兵衛さんは、大事にしている鉄砲を肩にかけ、肌身離さずお守りとして持っていたズンペラ石(この石に念ずると身を隠すことができるという)を懐にいれて馬越峠へ出かけた。

何日も待ち受けたが、なかなか目当ての大蛇が現れない。

権兵衛さんはあきらめず、鹿笛を吹きながら、馬越峠の道端の茂みに身を隠して待つことにした。だが、大蛇は現れなかった。

今度は場所を変えて、天狗倉山の頂上近くで待つことにした。

山に入って八日目。あたりが薄暗くなったころ、かすかにシダの葉が揺れ、ザア、ザア、ザアという音がしてきた。近くに何かがいる気配がある。もしや大蛇かもしれないと、権兵衛さんは息を殺してじっと待った。

ときおり、あたりから聞こえてくる奇妙な鳥の声や、キツネの鳴き声が静けさを破り、遠くの山やまにこだまする。そうこうしているうちに、ザア、ザア、ザアという音がしだいに大きくなってきた。それにつれてシダの葉っぱも激しく揺れ、間近に大蛇がいる気配を感じた権兵衛さんは、鉄砲を持ち直し、いつでも撃てる構えで待った。

すると、大蛇が現れ、かま首をあげ大きな口を開けて、権兵衛さんに襲いかかってきた。権兵衛さんはズンペラ石で身を隠し、できるだけ大蛇を近くに寄せ、口をめがけて一発、二発、三発と続けざまに撃ち込んだ。

怪物のような大蛇も、権兵衛さんの鉄砲に急所を撃たれ、たまたまのたうちまわって苦しみ、毒を吐きながら、山の斜面をころげ落ちていった。

村人たちは銃声を聞いて、歓声をあげながら峠へと急いであがっていった。権兵衛さんは大蛇の毒にやられ、道端に倒れていた。

村人たちは、戸板にのせて村へ急いで帰り手当をしたが、大蛇の毒のためにかからだ全体がはれあがり、亡くなってしまった(便ノ山の宝泉寺境内の権兵衛の碑には、元文元年(一七三六)没とある)。

村人たちは、権兵衛さんを懇ろに弔い、彼をしのび、今も語り継いでいる。

## 峰弥九郎ものがたり(一)

御浜町

### 弥九郎の犬

熊野の奥山にある坂本村の峰弥九郎は、普段は田畑を耕やし、山野を駆け巡って、狩りをして暮らしていたが、尾呂志の殿さまから呼び出しがあると愛用の火縄銃を持って駆けつけ、いくどかの戦いで手柄を立てた勇士でもあった。

弥九郎は、ある時新宮へ用があっていき、帰りが遅れて山道を急いでいたが、一升栗の峠までくると、もう日はとっぷりと暮れてしまった。峠を越え引作まで来たところで、

「夜道に日暮れはない。ここでひと休みしよう」と傍らの石に腰を下ろして、タバコを吸いはじめた。

弥九郎は、暗闇の中で何かうごめくものを感じ、あたりを見まわすと、二間(約四メートル)ぐらい離れたところで目玉がキラキラ光っている。よく見ると一匹の狼であった。

肝の太い弥九郎は、

「お前は狼ではないか。そこで何をしているのだ」というと狼は苦しそうに近づいてくる。

「何か苦しうじゃが、わしが見てあげよう」と狼の口に手をあてがい、中を調べた。

「おお、かわいそうに。大きな骨が刺さっている」弥九郎は狼の口に手を入れ、骨を抜いてやった。「どうれ。それでは帰るとしようか」

坂本の自宅に向かって歩き出すと、狼もトボトボと弥九郎の後をついてくる。弥九郎は、「狼よ、もうこの辺りでよいかから、お前も静かに休みなさい。そのかわりお前に子が生まれたら、一匹わしにくれんか」といって狼を帰し、家路を急いだ。

それから半年もたち、狼のことなどすっかり忘れていたある朝のこと、家の前でクンクンと子犬の鳴き声がする。戸を開けると一匹のかわいい子犬が弥九郎にまつわりついてきた。よく見るとそれは狼の子である。

「さては、前に助けた狼が、わしの言ったことを守って、この子をくれたのか」と大変喜んだ。

マンと名づけて大切に育て、大きくなると狩りにもつれていくようになった。マンは、弥九郎も驚くほどすばらしい猟犬となり、あたりでもその名が知られるようになった。

あるとき、新宮の殿さまが佐野のご猟場で巻狩りをするから猟師は集まるように、とのお布令が出て、弥九郎もマンを連れて巻狩りに参加した。

殿さまが山上でお供の人々と休んでいると、一頭の手負猪が飛び出し、殿さまがめがけて突き進んできた。あまりに突然のことで、お供の者もなすすべがなく、「あれよ、あれよ」とうろたえている間に、殿さまが襲われそうになった。そのとき、どこからか弥九郎のマンが飛び出してきて、手負猪ののど首めがけて飛びかかり、かみ殺してしまった。

危ういところを助けられた殿さまは大変喜んで、「あれは誰の犬じゃ」と尋ねた。お供の者が、

「坂本村の弥九郎の犬でマンと申します」

と答えると、さっそく、殿さまは弥九郎とマンを呼び出し、たくさんの褒美を与えた。

弥九郎とマンは、その後も暇さえあれば、山を駆け巡って狩りを楽しんだ。

ある日の夜、近くに住んでいる叔母さんが弥九郎を訪ねてきた。いろいろ話をしていたが、

「弥九郎よ、お前がかわいがっているマンは、狼の子じゃと世間では言うが、本当の話かのう」といった。弥九郎はこれまでのいきさつを話した。

「狼は人間にどれだけかわいがられても、生き物を千匹食べると、次は飼い主を襲うと昔からいわれている。イナゴ一匹でも生き物のうちに入るとのことじゃから、もうそろそろ千匹になるかもしれぬ。用心したほうがええぞ」と叔母さんは続けた。

外で聞いていたマンは、話が終わると悲しそうに三回夜空に向かって遠ぼえをし、姿を消した。

弥九郎は、朝になってマンがいないのに気づいて方々を捜したが、再び現れることはなかった。ただ、夜になると鷲ノ巣山の方から悲しそうな狼の遠ぼえが毎晩聞こえ、付近の人びとは、「あれは、マンの鳴き声だ」とうわさした。有名な紀州犬は、弥九郎が育てたマンの血を引いているといわれている。

## 峰弥九郎ものがたり(二)

### 御浜町

弥九郎が連れ帰ったお姫さま

弥九郎は、尾呂志の殿様に従って、関ヶ原の合戦に西軍・石田光成側として出陣した。弥九郎は火縄銃の名人で、これまで数々の戦に参加したが、このたびは戦場につく前に西軍は敗れてしまい、引き上げることになった。

負け戦に加わった熊野の武士たちの引き上げは哀れであった。まとまって行動はとれず、バラバラになって落ち延びてきた。

弥九郎は、その時、殿様から美しいお姫さまを預かった。姫にはお供が一人ついてしたが、熊野に帰る道は難所だらけ。元気な男たちでも苦労する峠越えがいくつもあって、途中ではぐれてしまう者も多かった。やっと熊野にたどりついて、馬越の峠を越えた時には、弥九郎とお姫さまの二人きりとなっていた。

いつも山野を駆け巡って狩りをしている弥九郎一人なら、これくらいのことは平気だが、か弱いお姫さまをかばいながらの帰り道は、なかなかかかどらない。尾鷲の八鬼山峠のふもとまでくると、もうお姫さまは一步も進めず、近くにあったお堂に入って一夜を過ごした。

あくる日、曾根次郎坂・太郎坂、波田須から大吹峠と続く難所を、姫を励ましながらどうやら越え、ついに七里御浜の一步手前の松本峠にたどりついた。

この峠をくだり、やっと上市木までくると、もう弥玖郎の里・坂本村はすぐそこであるが、上市木と坂本の間には小さな峠があり、付近の人々はここを睥山と呼んでいた。その名のとおりに寂しい場所である。弥九郎はお姫さまに、

「間もなく私の家に着きますが、あなたを連れてきたことを家の者に説明し、すぐ迎えに来ますので、すこしのあいだここで待っていてください」といいふくめ、大きな平石に敷物を広げてすわらせて、急いで家に帰った。

坂本村の我が家に着いた弥九郎は、家の者にお姫さまの話をした。妻は、

「かわいそうに、早く迎えにいかないと、日が暮れてしまいますよ」とせきたてた。弥九郎が睥山に戻ったころには、秋の陽は沈み、あたりは薄暗くなっていた。

お姫さまは大石の上に伏せていた。

「さては疲れ果てて寝込んでしまったか」

と近づいてみて驚いた。岩の上はべっとりと血がたまり、右手に持った短刀はのど首に深く刺さって、息絶えていた。

一人置き去りにされたと思いこみ、この世の無常とはかなさを嘆き、とっさに懐刀を抜いて自害してしまったのである。

弥九郎は悲しむ間もなく、姫のなきがらを坂本村に運び、村の墓地に手厚く葬った。

お姫さまが自害した大石(女郎石と呼ばれている)の上には、金の茶碗と金の橋が残されていたので、弥九郎は形見の品として持ち帰った。今も御浜町阪本の弥九郎の子孫の家に伝えられている。

途中ではぐれてしまったお供の武士も、方々をさまよったあと、やっと弥九郎の家にたどり着いた。弥九郎から姫の死を聞かされたお供の武士は、坂本村の下阪本に作られた姫の墓に参ると、その場で腰の短刀を抜き、腹に突き刺して果てた。

そこには、お姫さまの墓と、それを守るように横にお供の墓が残されている。二つの墓は、今はお参りする人もなくなったことから、無縁墓として草に埋もれている。

お姫さまの墓石には、風化しかけた刻字が認められる。

『慶長五年庚子十月二十一日、是ノ仏、旧八当村峯弥九郎成者、大坂夏ノ陣ニ出戦シ帰郷ノ際同伴シテ、東郡上市木嶺、睥山ニ於テ自死ス、此ノ人身柄八士族ニシテ西原出産ノ人也』とある。

これには大坂夏の陣とあるが、おそらくは関ヶ原への出陣であろう。当時、熊野の大勢は石田三成にくみし、総勢三百五十人が参加した。お姫さまとは、新宮堀内氏の娘か、堀内氏と共に西軍に味方した鳥羽城主九鬼氏の娘かの、いずれかではないかといわれている。

## かんからこぼしと治郎左衛門

### 紀伊長島町

熊野の国は長島浦というところに、湊治郎左衛門という、気がやさしくて力持ちのお侍さんが住んでいた。

この治郎左衛門は、白い馬をかっていた。

あるとき、その白馬にのって、隣の二郷村に用事にでかけた。すっかり帰りが遅くなったので、急いで帰る途中のことじゃ。

長島浦と二郷村の境を流れる赤羽川をわたろうとして馬を急がせていると、川のなかほどで白馬が急に動かなくなってしまった。

日も暮れかかり、帰りを急いでいたところなので、治郎左衛門はしきりにムチを入れたが、白馬はぴくりとも動かない。

不思議に思い、ふと後ろをふりむくと、なんと、ドングリまなこを光らせたかんからこぼし(河童)が、白馬のしっぽを両手でしっかりとつかまえていたんじゃと。

おどろいた治郎左衛門、

「なにをやるか。このかんからこぼしめ」

と太刀をぬくなり、ふりむきざまに、

「エイッ、ヤーッ」と切りつけた。

すると、かんからこぼしは「ギャーッ」とすさまじい悲鳴をあげ、水しぶきをあげて、川の中へ姿を消してしまったという。

やっと動き出した白馬を、川岸まですすめた治郎左衛門。

そこで、愛馬からおりてよく調べてみると、しっぽの先をしっかりとつかまえたままのかんからこぼしの右腕が、だらりとぶらさがっていた。

かんからこぼしの右腕をまんまと切り落とした治郎左衛門は、その腕を家に持ち帰り、

「かんからこぼしが、この腕を力づくで取り返しにくるかも知れない。やってきたら返りうちにしてやる」

そういって、治郎左衛門は床の間に腕をかざり、その前にどっかとすわりこみ、かんからこぼしのやってくるのを毎夜待ちうけていた。

長島浦では、この話がたいへんな評判になった。

「あの海や川で、悪たれのかぎりをつくしていたかんからこぼしの親玉が、治郎左衛門さんにやっつけられたんや」

「大事な右腕を、スパッと切り落とされたそう。その右腕とやらを、ひとめでも見せてほしいものじゃ」

浦の人たちは、入れかわり立ちかわり、治郎左衛門の家にやってきた。

その右腕は人間の手によく似ているが、水かきがある。そして青黒く、鋭いツメもはえている。

おそろおそろ、かんからこぼしの右腕を見た人たちは、

「本当に気味の悪い腕やなあ。これでは泳いでる最中に、尻子玉をぬかれるはずじゃなあ」

と、身をふるわせて話すのじゃった。

三日目の夜のこと。毎夜寝ずの番をして、さすがに治郎左衛門も疲れが出たのか、つい、うとうとしてしまったとき、

「トン、トン」

と、庭に面したざしきの戸をたたく音がした。

その音に気づいた治郎左衛門。かんからこぼしが、切られた腕をいよいよ取り返しにきたのかも知れないと、抜きはなった太刀を右手にかまえ、左手で戸をサッとあけた。

庭先には、案の定、片手のかんからこぼしがしょんぼりと立っていた。

「腕を取り返しにきおったのか、取れるものなら取ってみよ」

太刀をかまえた治郎左衛門に、かんからこぼしはあわてて残った左手を顔の前でふっていった。

「と、とんでもない。お前さまの十人力にはほとほとまいった。鉄よりかたいわしの腕を、キュウリのようにスパッと切り落としたからのう」

とおびえている。

「では、なにしにまいったのだ」

と治郎左衛門がだずねると、

「お願いじゃから、右腕を返してくだされ。わしは熊野灘ではかんからこぼしの中でも親方じゃ。腕を返してくれさえすれば、こんりんざい、お前さまの一族を海や川では死なさんよってに！」あまりにもあわれなその姿に、治郎左衛門は右腕を返してやったそう。

それからというもの、湊家の人々の中から、海や川で水難に遭う人はひとりとしてでなかった。

治郎左右衛門の時代から四百年近くたった今でも、長島浦の漁業者の家では、男の子が生まれると、初めて迎えるお正月に湊家におもむき、親子のさかづきをかわす習わしが続いている。

そうすると、その男の子は一生海で遭難することはないと信じられているからだそう。

ははこ  
母子くじらの話

海山町

むかし、奥熊野の入り江に、白浦という小さな漁村があった。海に面した白浦は、昔から漁業が盛んで、大勢の漁師たちが住んでいた。そのころの村は、くじらを使って豊かな暮らしをしていた。

くじらがどっさり捕れたときは、村中の人が出てくじらをさばいた。それでも人手が足りないと、隣村から人を頼んでいたという。

ところが、ある年、沖から白浦湾へ入ってくるくじらが一頭も姿を見せず、まったく捕れなくなった。

漁師たちは、かわるがわる海岸に出て、くじらを待った。しかし、とうとう、くじらはあらわれなかった。

ある日の夜、常林寺の和尚さんのまくら元に、たいへん美しい女の人が見れ、

「和尚さん、和尚さん。あした、わたしは子を産むために南の海へいきます。前の海を通りますが、どうか、私を捕らないで、見逃してくださるよう、村のみなさんに頼んでください。お願いします。」

といって消えていった。

あくる朝、和尚さんは、夢の中にあらわれた女の方は母くじらだと思い、

「これは大変なことじゃ、早く知らせよう」

と、くじら舟の網元や漁師たちの家いえへ出かけたが、もうみんな沖へ漁に出たあとだった。

そのころ、何隻かの小舟に分かれて乗った漁師たちは、くじらがないか必死になって捜していた。

一人の漁師が、潮を吹きながら湾の近くへ向かってくるくじらを見つけた。みんなはいっせいにくじらが泳いでいる方向へこぎ出し、やっとのことでたどりついた。

そして、くじらを舟で取り囲み、くじらから二、三十メートルほど離れたところから、何本ものもりを打った。

ハザシといわれている漁師が、くじらの弱ったのを見て海中に飛び込み、くじらに近づいて刀で刺す。それから、ちょうどよいときをうかがって、くじらの鼻を切り開き、これに網を通す。次に背びれを切り通して網をかけ、腹の下をくぐって締めくくる。

そんな手はずでくじらをつかまえて、久しぶりの大漁に喜びながら、舟が帰ってきた。

大きなくじらをつかまえたことで、村人たちはたくさん集まり、浜はにぎやかになった。さっそくくじらを浜へあげ、男たちがさばき始めると、和尚さんが夢で見たとおり、おなかの中に子くじらが入っていた。

それから、この村では、病気になる人が次々と出た。また、海が荒れてさらわれ、多くの人々が亡くなった。

そこで、村人たちは、母子くじらの霊を慰めるため、白浦の入口の丘に立派な墓をつくり、手厚く弔った。それからは、悪いできごとが起こらなくなったという。

母子くじらの墓“腹子持鯨菩提之塔”は、今も白浦の入口の海の見える丘に建っており、白浦の人たちによって大切に守られている。